

[巻頭言]

人生 100 年時代における本学会の役割

小林 満男

新潟国際情報大学 経営情報学部長

本学会の元会長である竹並輝之先生の後任として新潟国際情報大学情報システム学科に着任し、情報システム教育に従事して早や9年が経ちます。現在、大曾根匡編集委員長のもとで主に査読関連を担当しております。人生 100 年時代が叫ばれる今日、あらためて学会の役割について、企業戦士として一生を過ごす予定であったサラリーマンがあるきっかけで大学人になった経験を振り返りつつ、あらためて本学会の役割について考えてみたいと思います。

■学会とのつきあい

リンダ・グラットン教授らの『ライフ・シフト 100 年時代の人生戦略』によれば、現在の大学生の半数は 2100 年まで生きるだろうとのこと。そうすると大学、大学院で学んだ後、大半の人たちは少なくとも 40 年以上、おそらくは 50 年以上も企業や団体で働くことになると考えられます。

一方でその働き方は、超スマート社会 (society 5.0) を迎え、かなり自由な形になっているのではないのでしょうか。働きながら大学院や学会、研究会など多様な場に身を置きながら学ぶスタイルもかなり一般的になってくることが予想されます。

筆者は高専 5 年生の時に指導教授から勧められ電子通信学会 (現、電子情報通信学会) に学生会員として入会しました。電気通信研究所に勤務した数年間を除けば、法人営業に長く従事したため全国大会での発表や論文投稿には縁がありませんでしたが、44 年経った現在も加入しています。法人営業時代には最先端のサービスや技術を勉強する場として、社外の研究者や技術者たちと学会を通して交流できたことに感謝しています。現在は、職業柄、複数の情報関連学会と日本技術士会に加入しています。

■長寿化に対応した学会の役割

現在、国内の多くの学会では会員数が減少しています。人生 100 年時代を迎えつつある現在、学会の寿命は延びているのでしょうか。本学会には 3 つの世代の会員が同居しています。学生、大学

院生から社会に出て間もない世代、現役の研究者や技術者たち、そして企業や団体を退職され一線を退いたものの引続き研究活動や地域活動等に従事しながら後進の指導に当たっておられる方々です。学会は 20 代前半の若者から後期高齢者たちが集う場であり、先輩から後輩へノウハウや技術の勘所を伝授する場として、またお互いに切磋琢磨して学びあう場としても最適ではないでしょうか。

家庭での自己啓発や企業や団体での仕事を通じた学びに加え、3 つ目の学びの場所として社会人大学 (院) や学会の役割は益々大きくなってきているように思います。

筆者が入社して 2 番目に担当した仕事は自動車電話方式の導入でした。1979 年 (昭和 54 年) 12 月 3 日に東京地区でサービス開始した第 1 世代 (1G) である自動車電話方式の伝送容量は、アナログ電話 1 回線でした。

約 40 年を経て今春サービス開始する 5G は伝送容量ひとつとっても数桁も向上しています。ムーアの法則を上回る速さで高速大容量化を実現したモバイルも、1G から 5G システムの開発から運用にわたる技術・ノウハウは膨大で、次世代 (6G) 開発のヒントが埋もれているはず。各世代を担当した研究者や技術者たちが集まり、お互いに学び合う時間はあまり残されていません。

情報処理や情報システムの分野でも同様かと思えます。学会はこうした若手世代、現役からシニア世代が所属する企業や団体を超えて触れ合う場として、また議論し相互に学ぶ場でもあると考えます。

■学会の魅力向上に向けて

情報に関連した学会は、会員数で見ると、数十人規模の研究会レベルのものから数百人、そして情報処理学会のように 1 万人を超える学会もあります。規模に応じて実際にできることは限られることから、関連学会との連携強化が求められます。

個々の会員は、研究テーマなど様々な理由から複数の学会に加入している現状をふまえ、会員からみた本学会の魅力向上に向けた試案を提案してみます。

<若手世代にとって>

学部学生や大学院生、若手研究者にとって学会

[巻頭言] 2020 年 3 月 23 日受付

© 情報システム学会

は研究成果の発表を通し、第一線で活躍されている研究者たちや同世代の会員と交流しながら学べる貴重な機会です。

多くの参加者と具体的な内容について議論ができるポスターセッションは、発表者にとっても参加者にとっても有益かと思えます。また若手世代の会員が多く、学会員と知り合うきっかけを提供することも必要でしょう。例えば、懇親会等における参加者全員による一言挨拶などは、費用もかけずにすぐに行えます。学会に入会したものの、学会の魅力を感じることなく入会した年だけの付き合いで終わる会員をなくす方策を考える必要があります。

＜現役世代にとって＞

キャリアを重ねる毎により多忙となる中で、論文を書く時間がない、発表する時間がない等、悩みが尽きない世代ですが、同時に本学会においても中心的な役割を果している世代でもあります。現役世代にとり学会は、研究成果の発表の場として、また情報収集やアイデアを膨らませる場として、何よりも本業に役立つ場であることが期待されています。

情報システム (IS) や情報通信技術 (ICT) はほとんどの場合、“〇〇×ICT” という形で利用され、対象となる〇〇には、農業をはじめとして、金融や医療などあらゆる分野が関係してきます。これらの異分野の関係者たちに情報を発信し、研究会やシンポジウムなどを通して触れ合う場をつくるのも現役世代の必要な役割かと思えます。本学会から異業種間での共同研究やプロジェクトが生まれるようになれば、学会の魅力はもっと増すはずで。

＜シニア世代＞

日本中、どこに行っても元気なシニア世代が頑張っています。シニア世代には学会活動を断捨利の対象とせず、知的好奇心を満たす場としてまた楽しむ場として積極的に学会利用を促すような仕組みが求められているように思います。シニア会員が若手会員と交流するサロンのような場を設けてみてはいかがでしょうか。

経済的に割が合わないかもしれませんが、社会的に有益と思われる「記録を残し、次世代に伝える」領域でこれまでに培ってきた経験をぜひ、活かして頂きたいのです。

技術的な事柄のかなりの部分はウェブページのどこかにあるかもしれませんが、やはり直接に教わる効果は計り知れません。

これまで培ってきた情報システムの企画開発や運用経験をふまえ、中高生や大学初年度生を対象とした人間中心の情報システムのテキストや副読本を学会として執筆するなど、情報システムの面白さとか奥深さを実感してもらおう上でシニア世代の果たす役割は大きいと思えます。

■最後に

学会会員にとって学会の魅力向上する観点で検討してきましたが、企業や団体、社会から本学会に期待する役割が向上すれば会員にとっての魅力も向上するはずで。本学会は一貫して人間中心の情報システムを提唱してきましたが、軸足を人間中心におく考え方は、我が国が目指すべき未来社会の姿として提唱されている Society5.0 の考え方と軌を一にするものです。

本学会の魅力を高め、一人でも多くの会員が集い、次の世代に繋いでいく長寿学会となるよう微力を尽くしたいと思います。

著者略歴

小林 満男 (こばやし みつお)

1976 年仙台電波工業高等専門学校電波通信学科卒業。同年日本電信電話公社入社。

NTT,NTT コミュニケーションズにて通信ソフトウェア開発、法人営業等に従事。

2011 年新潟国際情報大学情報システム学科教授就任。埼玉大学博士(経済学)、技術士(電気電子)、電気通信主任技術者、第 1 級総合無線通信士、自治体衛星通信機構理事。